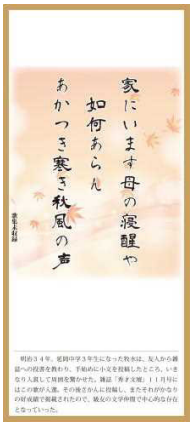
文学館だより

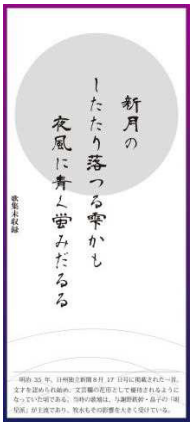
令和 6年　7月 1日
若山牧水記念文学館
TEL　0982－68－9511
文責　日高　第99号

企画展「牧水の花鳥風月」始まります

牧水没後90年記念事業として開催した「牧水の花」展、「牧水の鳥」展、「牧水の風」展、「牧水の月」展を再編成し、今回は「牧水の花鳥風月」展を一挙公開いたします。牧水が詠んだ自然の風景をご堪能ください。

会期　令和6年7月4日（木）～8月28日（水）





沼津牧水会刊行
『牧水 鳥』

沼津市制百周年記念

文学館にて取り扱っています

夏の鳥　　随筆『海より山より』

山深く、若しくは渓の奥深くわけ入ろうというのならば別、東京あたりの郊外にぶらりと杖をひいて聞き得る鳥のなかでは私は頬白鳥（ほおじろ）が好きである。

樹木ならば楢（なら）か櫟（くぬぎ）の落葉樹、しかもそのおち葉に似た親しみをこの鳥は持っている。漸く色づきかけた麦の畑中の径をぶらぶらと歩いていると、不意に頭の上の桜の梢などから、

一筆啓上つかまつりそろ

と啼くというこの鳥の寂（さび）深い声が落ちて来る。驚いて見上ぐると微風にそよいで光っている葉がくれにやはり落葉色をしたこの小鳥が静かにとまっているのである。佇んで耳をすましていると、今度は向うの岡の何やらの木の上でも同じのが啼いている。あちらがやめれば、こちらのがまた啼き初める。

遠く続いた麦のいろにも、ほかほかする地のほめきにも、光り煙っている岡の上の雲のむれにも、歩き疲れて何やら浮世なつかしくなっているわれ等のその時の心にも、すべてによく調和して、しみじみと耳が傾けらるる。

月並のようだが、私は杜鵑（ほととぎす）も好きである。

私はこの鳥を聴いているとずっと昔の太古の世界をふらふらと思い浮べる事が多い。たった独り、この世に生れ落ちているような寂しさを感ずる事が多い。

夜はいやだ、真昼の雲が四方の空に輝いている時に聴くのが好きだ。渓間でもよい、原の中ででもよい。

梟も好い。

ゆうぐれ、または東明（しののめ）の寝ざめなどに思わずも聞きつけて、心を澄ますことが多い。

ひとつひとつ足の歩みの重き日の皐月（さつき）の原にほほじろの啼く
わが死にし後（のち）の静けきかかる日に斯くほほじろの啼き続くらむ
ほととぎす聴きつつ立てばひと滴（たま）のつゆよりさびしわが生くが見ゆ
わがいのち空に満ちゆき傾きぬあなかすかなり遠ほととぎす
真昼野や風のなかなるほのかなる遠き杜鵑（とけん）のこゑきこえ来る
暈（かさ）帯びて日は空にあり山々に風青暗しほととぎす啼く
朝雲ぞ煙には似るこの朝けあわただしくも啼くほととぎす
なきそめしひとつにつれてをちこちの山の月夜に梟の啼く
たそがれのわが眼のまへになつかしく木の葉そよげり梟のなく
耳すませばまこと梟にありにけりさびしき鳥をきけるものかな

伊藤一彦短歌実作講座　　令和6年度スタートしました

伊藤一彦短歌実作講座（日向若山牧水顕彰会主催）。
新しい講座生 8 名を迎え、32 名でスタートしました。伊藤先生の講話の後、実作講座へと進みました。

実作講座のながれ

（1）事前にひとり 1 首提出し、全員の歌を鑑賞しておく。
（2）当日、1 番の歌から順に鑑賞していく。この時点では作者はわからない。
　・1 番目の人が 1 番目の歌を読み、感じた思いなどを発表する。
　・質問・意見があれば自由に発表し、相互理解を深める。
　・最後に、伊藤先生から講評を受ける。
　・2 番目の歌以降も同様に進める。
（3）すべての歌の鑑賞が終わった時点で作者を知る。
　・自分が作った歌の背景、心情等を発表する。

今回は、「こうするともっとよくなる」という視点での講評がありました。

病みてより食の進まぬつれあいに理詰めで攻める蛋白ビタミン

◯「理詰めで攻める」がユーモラスである
▽結句は体言止めでない方がよい　⇒蛋白ビタミンを　or　蛋白ビタミンと
　もしくは、「蛋白ビタミンを理詰めで攻める」としたらどうだろうか

夫(つま)なき後(ご)よくも一人で暮せたとほめてやりたいあと十年も

▽字余りであっても、「夫なき後（のち）」、「夫なき後（あと）」の方がよい
　大和言葉の方が意味がわかる

◎添削がなかった作品

ウクライナ・ガザの映像切替えて音量落し見る「翔タイム」
シャワーすみ鏡に向かう我が顔に母の顔あり祖母の顔あり
「おいしいよ」孫が言ふから買ひにけり二個で百円きびだんごなり
マネキンの並ぶ姿のスーツの子ら社会人へのきざはし昇る

今回、初参加された講座生のおひとりが、講座の2日後、早速、文学館を訪ねてくださいました。「初めて来たわ。知らなかった。あなたはこんな所で働けて幸せね。」と言っていただきました（*^o^*）

「三世代のいちごつみ」　ついに「牧水」登場 ！

4 月号で紹介した「**三世代のいちごつみ　短歌でつなぐ365日**」。
ついに・・・？　早くも・・・？「**牧水**」が登場しました!!

5/14 No.135【 長 】成長の姿たのもし宮崎の短歌ネイティブ、牧水を追う　乃上あつこ
5/ 15 No.136【牧水】牧水が産まれ直して呑みにくるほどのうまさよ鍋島の味　久永草太

「いちごつみ」は短歌をリレーしていく遊びのひとつです。前の人が詠んだ歌から好きな一語（いちご）を摘んできて、その一語を詠み込んで歌を作る、そしてまた次の人へ、と短歌を詠みつないでいきます。相手の語彙の畑から一語を収穫できるので、普段自分があまり使わないような言葉と出会えることが「いちごつみ」の面白さです。（三世代のいちごつみサイトより）

牧水先生の一首

折に触れて出会う一首を紹介しています

きゆうとつまめばぴいとなくひな人形、きゆうとつまみてぴいとなかする

「納戸の隅に折から一挺の大鎌あり、汝が意志をまぐるなといふが如くに」（先月号）同様、第 6 歌集『みなかみ』に収録されている歌です。この頃の歌は三十一文字の定型を破り、読点（、）を用いたものが多く見られるのが特徴です。

傲慢(がうまん)なる河瀬の音よ、呼吸(いき)はげしき灯(ひ)のまへのわれよ、血のごとき薔薇よ